

「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

プロジェクト責任者 井上順孝

1. プロジェクトの概要

日本文化研究所のプロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」は、「デジタル・ミュージアムの構築と展開」(2007～2009年度)、「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」(2010～2012年度)の両プロジェクトを継承し、2013～2015年度の3年計画で実施されたものである。以下では、本プロジェクトの最終年度となった2015年度の成果を紹介した後、2016年度から3年間の新規プロジェクトである「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」の計画について概要を示す。

本プロジェクトの事業内容には、主に二つの柱があった。一つは、2009年から本格的な運用が開始された「國學院大學デジタル・ミュージアム」(<http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/>)について、研究開発推進機構内の諸機関や図書館、関連部署等と連携して円滑な運営を行い、内容の改善を進めることであった。もう一つは、本プロジェクト独自の調査研究を展開し、それに基づいたデジタル・コンテンツを拡充することであった。

また、本プロジェクトでは、教育活動への活用・還元という点を特に重視し、これを前述の二つの柱の双方に適用しながら、事業を展開してきた。とりわけ、後者の独自のコンテンツ作成の面では、宗教文化に関する教育のための教材作成に力を入れてきた。この点については、「宗教文化士」資格の認定制度の運営を担う「宗教文化教育推進センター」

(CERC、サーク、本研究所内に設置)との緊密な連携を取りながら進められた。

2015年度の本プロジェクトメンバーは、以下の通りであった。

責任者 井上順孝

分担者

専任教員：平藤喜久子、星野靖二、塚田穂高、鈴木聡子

兼任教員：ノルマン・ヘイヴンズ、黒崎浩行、斉藤こずゑ

客員研究員：李和珍、市川収、カール・フレレ

PD研究員：加藤久子

研究補助員：村上晶

客員教授：ケイト・ナカイ、土屋博、星野英紀、山中弘

共同研究員：イヴ・カドー、ヤニス・ガイタニディス、キロス・イグナシオ、ジャン＝ミシェル・ビュテル、市田雅崇、今井信治、小堀馨子、野口生也、藤井麻央、牧野元紀、山梨有希子

2. 2015年度の成果

(1) 「國學院大學デジタル・ミュージアム」の運営

各種のデータベース・事典等(現在26種)をウェブ上で総合的に検索・閲覧・利用できる「國學院大學デジタル・ミュージアム」(DM)は、基本的な部分についてはすでに確立されているため、さらなる利用しやすさの改善とコンテンツの充実に力を注いだ。

機構内の他機関の担当者、システム担当者、図書館・機構事務課・広報課等とともに、「デジタル・ミュージアム・ワーキンググループ」会議を年度内に7回開き、課題の共有と改善案の検討を行った。

2015年度は、文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」に、國學院大學博物館が中心となった「東京・渋谷から日本の文化を国際発信するミュージアム連携事業」が採択された。よって、博物館のサイト構築や、そこにおけるDMとの連携についても集中的に検討を進めた。

DMに関しては、データベース数が増加したことを受けて、各データベースの簡単な説明をまとめたページの構築が検討され、その文面と形式が確定された。また、機構内各機関のサイト内容も同様に点検され、特に多言語化（英訳）について、機構スタッフの英語表記の取りまとめを中心に、検討と情報集約が進められた。

(2) プロジェクト独自の調査・研究等

◇国際研究フォーラム「『日本文化』研究の展望」の開催

2015年10月25日（日）には、國學院大學学術メディアセンター1階常磐松ホールにおいて、本研究所の主催により、国際研究フォーラム「『日本文化』研究の展望」が開催された。これは、前日24日（土）の公開学術講演会（研究開発推進機構主催）とともに、日本文化研究所の設立60周年記念事業の一環として行われたものである（本号「2015年度のトピック1」を参照）。

同フォーラムでは、4名の発題とコメント、討議が行われた。発題者とタイトル、コメントは以下の通りである。

- ・篠田謙一（国立科学博物館人類研究部長）
「DNAで読む日本人の形成史」
- ・ウィリアム・ケリー William W. Kelly

（イェール大学教授）

「Is Japan a Lost Cause or a Sustainable Model? An Anthropological Perspective on the Contemporary Society」

・スチュワート・ガスリー Stewart E. Guthrie（フォードム大学名誉教授）

「Religion as Anthropomorphism: A Cognitive Theory」

・河野哲也（立教大学教授）

「アフォーダンスと生態学的倫理学の構築」

・コメンテーター

井上順孝（國學院大學教授）

・司会

松村一男（和光大学教授）

日本文化と宗教文化が交わるテーマについて、複数の学問領域からの先端的な知見を踏まえた活発な議論が交わされ、本研究所の名となっている「日本文化」について深く再考が迫られる機会となった。

なお、同フォーラムでの議論を下敷きとして、國學院大學日本文化研究所編・井上順孝責任編集『〈日本文化〉はどこにあるか』（春秋社、2016年8月）が刊行された。

◇EOSの点検

2015年度には、英文のオンライン神道事典 Encyclopedia of Shinto (EOS) の充実・改善作業が継続して進められた。アップロード済みの本文内容をチェックし、統一性・整合性を確保する作業を行った。

また、韓国語版においても公開内容ならびに添付メディアファイルの点検が進められた。

なお、EOSですでに公開済であった「年表」に修正を加えた上で、『*Encyclopedia of Shinto: Chronological Supplement*』として刊行した（本号「出版物紹介」を参照）。

◇双方向論文翻訳

本プロジェクトではこれまで、神道・日本文化に関する研究を国際的に発信するため、また海外の研究を日本に紹介するために、日本語から外国語、外国語から日本語への翻訳を行って、ウェブで公開する事業を継続してきた。

2015年度には、次の2論文を選定して翻訳を行った。日本語から英語へのものが1点、英語から日本語へのものが1点である。

- ・日本語から英語へ翻訳された論文類
石井研士「神社神道と限界集落化」(英訳 Community Marginalization and *Jinja Shintō* 翻訳者: CASTIGLIONI, Andrea)
- ・英語から日本語へ翻訳された論文
ROTS, Aike P. "Sacred Forests, Sacred Nation: The Shinto Environmentalist Paradigm and the Rediscovery of *Chinju no Mori*" (邦訳: 聖なる森、聖なる国—神道環境主義のパラダイムと鎮守の森の再発見—) 翻訳者: 齋藤公太)

◇教派神道・神道系新宗教の教団基礎資料のデジタル化と公開

本研究所ではこれまで、神理教や神道修成派を中心とする教派神道や神道系新宗教に関する文書資料が集められ、その整理とデジタル化が進められてきた。DMのなかにはすでに、「教派神道関連資料データベース」が構築されており、公開体制が整備されてきている。2015年度は、神道系新宗教関係の資料を中心に、公開準備作業が進められた。

◇現代宗教に関する資料・データの収集とデータベース構築ならびに公開

宗教文化教育推進センター事業、ならびに2015年度國學院大學特別推進研究「国際的視点からの宗教文化教育教材の総合的研究」(研究代表者: 井上順孝)と連携しながら、宗教文化の教育と学習に役立てられる現代宗

教に関する資料・データの収集とデータベースや教材の作成が進められた。

すでに公開済の「博物館と宗教文化」「宗教文化を学ぶための基本書案内」「世界遺産と宗教文化」データベースの点検作業が行われた(本号「2015年度のトピック2」、ならびに宗教文化教育推進センターのサイト <http://www.cerc.jp/> を参照)。

3. 新規プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」の2016年度の研究計画

◇「國學院大學デジタル・ミュージアム」の運営

デジタル・ミュージアムの運営については、従来通り、ワーキンググループ会議を定期的に行き、課題共有と意見交換を行う。

2016年度は、デジタル・ミュージアム上の画像を第三者が利用する際のルール作りや、スマートフォン対応、動画、音声使用の利便性の向上などを中心的課題として取り組んでいく。

また、地図アプリ「ロケスマ」(株式会社デジタルアドバンテージ)を活用したデータベースの構築と公開については、そのコンテンツの充実も図っていきたい。

なお、2016年度は前々年度・前年度の同種事業に続き、文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」に、國學院大學博物館の「東京・渋谷から日本の文化・こころを国際発信するミュージアム連携事業」が採択された。同事業には、本プロジェクトの事業内容とその目的が重なり合う部分もあり、これまでのプロジェクトで培われてきたコンテンツとノウハウの活用が引き続き求められる。よって、同事業とも連携を取って各種の事業を進めていく。

◇神道に関する日本語、英語のポータルサイトの構築

すでに DM において構築・公開されている「EOS」「双方向論文翻訳」「Basic Terms of Shinto」「Images of Shinto」の各データベースの内容を点検しつつ、利用者とりわけ外国人ユーザーの利便性の改善を行う。

国内外の学生が神道を学ぶ際に活用でき、神道に関する情報への入口となるようなポータルサイトの構築を進める。今年度はそのレイアウトの検討を行う。

◇神道古典の英語訳

本プロジェクトでは、新たに神道古典の英語訳に取り組む。研究開発推進センターの「『古事記学』の構築」研究事業等と連携しながら、古事記の英語訳を進める。訳文や訳語を検討・決定し、注釈も含めた翻訳を進め、公開にあたっては専門家による精査を経ることで、国際的に信頼され長く使用される翻訳の提供を目指す。

◇収集している教派神道・神道系新宗教の資料の整理とデジタル化

DM 内の「教派神道関連資料データベース」で公開が開始されている教派神道の神理教の資料を始め、教派神道・神道系新宗教に関する文書資料の整理と公開を進める。同データベースのコンテンツの充実をはかることで、教派神道・神道系新宗教の研究の進展に資することを旨とする。

◇宗教文化教育の教材研究の国際的展開

宗教文化教育推進センターと連携を継続し

ながら、教材作成を進める。

これまで公開されてきた宗教文化の学習に活用できる映画・世界遺産・博物館・参考文献等に関するデータベースの拡充と点検を行う。

動画教材を配信するためのシステム構築を目指し、これまで蓄積されてきた動画の整理とデータベース化、公開形式についての検討を行う。

また、2016年11月20日に第11回が実施予定の宗教文化士認定試験（第10回は6月26日に実施済み）事業等にも協力していく。

あわせて、「宗教と社会」学会の「宗教文化の授業研究」プロジェクトとも連携し、授業研究会を継続して行う。

◇「学生宗教意識調査」のまとめ

「宗教と社会」学会の「宗教意識調査」プロジェクトと共同で1995年から2015年まで全12回にわたり行ってきた「学生宗教意識調査」のまとめを行う。データの整理と、さらなる分析を加え、報告書としての刊行を目指す。

◇国際研究フォーラムの開催

2016年度は、10月15日（土）のSISR（国際宗教社会学会）東アジア国際ワークショップと連携し、「東アジアのグローバル化と宗教文化」というテーマで、10月16日（日）に国際研究フォーラムを開催することとなった。東アジアの宗教文化や宗教意識についての現況を共有することで、国際的な研究ネットワークの構築が一層進展することが期待される。